〈論 説〉

ディストピアへの系譜

渡　辺　千　晴

はじめに

長い間、先人たちは「ユートピア」に希望を託し、その世界観によって自らが直面している悲惨な現実を打破せしめんとしてきた。だが「ユートピア」において、同じ発音の単語が二つ存在する。「Utopia（無い場所）」と「Eutopia（良い場所）」である。両者ともイギリスの人文主義者トマス・モアによって作られたとされる、人工的な造語である。よって、「ユートピア」の性質において、そこで提示される場所は、聖書に出てくる千年王国のような類いのものではない。ミレニアリズムでは、人為性の関与する余地は初めから無い[1]。「ユートピア」とは、人間が自分の意思に基づいて自らの手によって造りあげるものである。

明治15年、日本で初めてトマス・モアの『Utopia』が出版されたとき、翻訳家の井上勤は後者の意味を採用し、題名を『良政府談』と訳した。その後、萩原絹涯は明治27年に再びこの本を翻訳し直し、題名を『理想的国家』と付けた。日本において『ユートピヤ』と訳されることになるの

1　三上剛史(著)「ユートピアニズムとミレニアリズム：ユートピア論における聖俗理論的視座設定への布石」『ソシオロジ』第29巻 2 号，1984年 pp. 45–63, 160. p. 54.

は、大正 2 年からである[2]。「ユートピア」は長年、人々の理想を反映する「善きもの」とされてきたのだ。だが、それはある時点から「善き」場所のみを示唆するようになり、また別の時点からは、かつて「善き」場所だったものを批判する表象となってしまった。

この変遷の背景には何があったのだろうか。そして、その場所に込められた理念自体には、果たしてどのような歴史的意味が含まれ、進化の道を辿ってきたのであろうか。

1．ルネサンスとユートピア

ユートピアの源泉を辿ると、ルネッサンス期にまで遡る。14世紀のイタリアでは、フィレンツェなどの都市を中心に商業が発展しており、自己の力による富の蓄積が可能となっていた。それにより、かつては生まれによって職や生活を保障していた中世の身分的秩序は廃れ、自由に自分の力を開花させることができた。そして、このルネサンスを境に、人間は「理性人として主体的、積極的な価値の保持者[3]」となった。

だが、人々の関係における秩序が無くなったことによって、競争や争いが絶えなくなり、不安定な格差が生じるようにもなった。15世紀末には、このイタリアのルネッサンスの影響は北ヨーロッパの方にも出始めていた。

このような状況下で『ユートピア』（1516）は、16世紀イギリスの偉大な人文主義者であるトマス・モアによって執筆される。福田はルネッサンス期において、中世における秩序が崩されたために、人間の感性の解放と人間に対する大きな自信又は人間の尊厳の考え方が生みだされたとし、そのこととユートピアを下記のように結びつけて語っている。

2　cf. 宮井敏(著)「トマス・モア『ユートピア』の新らしい日本語訳」『同志社大学英語英文学研究』21号，1979年 pp. 154–160.

3　伊達功(著)『ユートピア思想と現代』創元社 1978年 p. 51.

（…）ユートピアという考え方は、いわば非常に高い理念を持った人間が、しかし現実においては、いかんともすることもできない。それを変える現実的方法が与えられていないような、悲惨な現実と向き合うとき、その理念と現実とのあいだのひどいギャップ、激しい隔りというものを、今度は彼の構想力によって超えようとして、人間の理念に従って、そこに可能な社会の構図というものを構想してみるときに、生まれたわけであります。それはやはりこのルネッサンスの生み出しました、ヒューマニズムの理念と人間の構想力の解放という前提の上に、あらわれてまいりました、一つの政治思想であります[4]。

福田が言及している通り、モアが描いた「国家」は人文主義を基盤としている。それでは、彼の「ユートピア」における規範とはどのようなものであったのだろうか。

15世紀半ば、国王ヘンリー六世が僧侶ジョン・リドゲイトにアリストテレスの作品を翻訳するように命を下してから16世紀に至るまで、イギリスの政治論はギリシア古典からの影響が支配的であった。「政治 policy」という言葉がブリテン島にもたらされたとき、それは徳にかなった社会を実現するために、統治が準拠すべき思慮や正義などの徳にもとづく活動、あるいは実践哲学を意味していた[5]。政治社会における道徳的完成を目指したプラトンやアリストテレスの徳に基づいた統治理論は、モアのユートピアにも色濃く表れている。最初のユートピア作品とされるプラトンの『国家』は、「正しい国家社会の構想」である[6]。モアはプラトンを引き合いに出し、次のように述べている。

4　福田歓一（著）「近代の政治思想―その現実的・理論的諸前提」『福田歓一著作集 第五巻』岩波書店 1998年 p. 38.

5　塚田富治（著）『カメレオン精神の誕生―徳の政治からマキアヴェリズムへ―』平凡社 1991年 p. 48.

6　cf. プラトン（著）藤沢令夫（訳）『国家（上・下）』岩波書店 1979年.

プラトンの慧眼はよく、あらゆるものの平等が確立されたら、それこそ一般大衆の幸福への唯一の道であることをみぬいていたのです。そして、この平等ということは、すべての人が銘々自分の私有財産を持っている限り、決して行わるべくもないと私は考えています。いろいろな権利や口実を設けては出来るだけ多くのものをよせ集め掻き集め、ありとあらゆる富は少数の者たちだけで山分けにする、そういった国ではいくら豊富に貯えがあっても、少数の者以外の者にはただ欠乏と貧窮が残されているばかりです。しかも多くの場合、この後者の貧乏人の方が前者すなわち金持などよりも、いっそう幸福な生活をたのしむ権利があるのです。なぜかと申しますと、金持は貪欲で陰険で非生産的でありますが、貧乏人は謙虚で純情で日々労働によって自分の利益そのものよりもむしろ全体の福祉に貢献をしているからです[7]。

当時のイギリスの人文主義者たちにとっての重要な課題は、不正と貧困の根本原因を発見し、解決することであった。そこで、モアは『ユートピア』によって、どのようにすれば社会的差別を撤廃し、徳に基づいた社会を生みだすことができるのかという問題提起に対して、私有財産の放棄という解決策を提示したのだ[8]。

また、ルネサンス期は国際的な面でも発展していた。モアは『ユートピア』の主要部分を当時のヨーロッパでは第一の貿易港であったアントロープで執筆したこともあり、彼の描くユートピア島では外国貿易が盛んに行われている。このことが、モアのユートピア像にみられる中世的な影――たとえば修道院をモデルとした構想など――にもかかわらず、開放的な国民国家規模の近代ユートピアを成立させた[9]。

7　トマス・モア（著）平井正穂（訳）『ユートピア』岩波書店 1957年 p. 62.

8　cf. クェンティン・スキナー（著）門間都喜郎（訳）『近代政治思想の基礎―ルネッサンス、宗教改革の時代』春風社 2009年 pp. 275–276.

9　田村 秀夫（著）『社会思想史への道』中央大学出版部 1995年 p. 167.

本書はその後次々に翻訳され、彼の観念は周囲のヨーロッパ諸国に強い影響を与えた。この「ユートピア」に便乗する形で、ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエは、ヨーロッパから亡命したルター派のキリスト教徒たちによって建設された宗教的共同体社会を『クリスティアノポリス[10]』（1619）で描き、トマーゾ・カンパネッラは「形而上学者[11]」たちによって率いられる純然たるカトリック神政国家を『太陽の都[12]』（1623）で画き、その後フランシス・ベイコンは科学技術の発展とキリスト教が調和した「ベンサレムの国」を『ニュー・アトランティス[13]』（1627）で描写した。上記の作品群などに見られるように、本来のユートピアの形や意図とは異なる、キリスト教的共同体による「理想的」社会としての新しい「ユートピア」の形が流行したのであった。

しかし、これらの新たな「ユートピア」群は、モアのユートピアと共通する土壌を持って開花したことをあえて強調しておかなければならない。カナダの文芸評論家であるノースロップ・フライは、ユートピア成立の背景について次のように述べている。

> モアの『ユートピア』は、16世紀イングランドの生活の混沌を風刺することから始まり、それとの対比としてユートピアそのものを提示している。このように、典型的なユートピアは、暗にではあるが、作家自身の社会に内在する無秩序への風刺を含んでおり、ユートピアという形式は、無秩序が最も社会的な脅威であると思われるときに最も繁栄するのである[14]。

10　cf. ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（著）加藤守（訳）「クリスティアノポリス」池上俊一（監修）『原典 ルネサンス自然学 下』名古屋大学出版会 2017年.

11　『太陽の都』における主権者は祭司で、その住民たちの言葉では「太陽」と言う。主人公の語り手（ジェノアの船長）の言葉（イタリア語）では「形而上学者」と訳される。

12　cf. カムパネルラ（著）大岩誠（訳）『太陽の都』岩波書店 1950年.

13　cf. ベーコン（著）川西進（訳）『ニュー・アトランティス』岩波書店 2003年.

14　Northrop Frye. (1965). Varieties of Literary Utopias. In Frank E. (ed.), *Utopias and Utopian Thought* (pp. 25–49). Boston: Beacon Press. p. 27.

ユートピアは現実の無秩序状態に対して、人工的に新たな秩序をもたらす特性を持つ。よって、18世紀後半にイギリスで起こった産業革命を転換点として、社会が工業化・都市化され、経済的自由主義の方向へ進んだ時点で、必然的にまた別の新しいユートピアを生みだす啓蒙的土壌を形成していくのであった。

2．功利の時代と「ユートピア」の開放

産業革命以来、かつての宗教的禁欲主義の基本概念である「労働・節制」は世俗化され、人びとは富を追求し貯蓄することで「資本[15]」を形成していった。そして、人々が物質的幸福を目指し、ベンサム的功利主義の風潮を構築していく中で、「富」の格差は徐々に広がり、社会主義[16]が唱えられるようになる。川端は、この新たなユートピアについて、以下のよ

15　マルクスは『資本論 第一巻』(1867) で、資本の蓄積について以下のように述べている。

「資本の本源的蓄積、すなわち資本の歴史的な創世記とは、結局どういうことなのか？それは奴隷および農奴の賃労働者への直接的転化、したがって単なる形態変換でない限り、直接的生産者の収奪、すなわち自分の労働にもとづく私的所有の解消を意味するにすぎない。

社会的・集団的所有の対立物としての私的所有は、労働手段と労働の外的諸条件とが私人に属する場合にのみ存立する。」――マルクス(著) 資本論翻訳委員会(訳)『資本論 第1巻b』新日本出版社 1997年 p. 1297.

16 「印刷物のなかに「社会主義」および「社会主義者」という言葉が現われるのは、一八〇三年にイタリアにおいてであるが、しかし、後にそれらの言葉が含む意味とは、まったく無関係に使用されたといわれる。用語の固有の意味で「社会主義者」という言葉が用いられるのは、一八二七年に、オウエンの『協同組合雑誌』においてである。それはオウエンの学説の信奉者を指す言葉であった。同様に、「社会主義」という用語は、サン・シモン派が自分たちの学説を特徴づけるために、ピエール・ルルーの編集する機関紙『地球』において、一八三二年に用いたのが最初である。(…)これらの用語が普及するにつれて、社会主義および社会主義者とは、サン・シモン派、フーリエ派、オウエン派を指示するものとなり、また彼ら自身も、自分たちを社会主義者と称した。」――五島茂，坂本慶一(著)「ユートピア社会主義の思想家たち」オウエン，サン・シモン，フーリエ(著) 五島茂，坂本慶一(責任編集)『世界の名著 続8　オウエン　サン・シモン　フーリエ』中央公論社 1975年 p. 80.

うに述べている。

> かつてルネッサンスのユートピアが、地理上の発見、国民国家の成立、人文主義あるいは宗教改革にみられる新しい哲学思想という三本の柱の上に立っていたのに対し、新しい時代のユートピアはフランス革命の影響、産業の発展、過酷な現状打開のための社会改革案を三本の支柱とした。これ以後社会主義運動とユートピア思想との間には切っても切れない縁ができあがる[17]。

この頃の社会主義の思想家として、オウエン（1771〜1858）、サン・シモン（1760〜1825）およびフーリエ（1772〜1837）が挙げられる。オウエンは、人間の性格が常に環境によって形成されるとし、当時の就労体制を批判した。そして、秩序・規律・節制・勤勉の習慣を生成する協同社会を実現しようとした。サン・シモンは、現在が理神論から物理主義への移行期であると考え、科学と産業に重点を置き、産業階級が中心となる組織化された社会を目指す。フーリエは、産業主義を科学的幻想であるとし、文明社会に代わる「ファランジュ」（生産と消費にわたる生活協同体）から成る新しい調和社会を構想した。

だが、彼等の革命を伴わない局地的な改革案は、後にエンゲルスやマルクスによって批判され、彼等は「ユートピア社会主義者たち」と称されることとなる。しかし、マルティン・ブーバーは次のように語っている。

> (…)「ユートピア」社会主義者たちは、いよいよもって、社会の構造的更新を追求した。――それは、マルクス主義的批判者たちが考えるように、片のついた発達段階を復活しようというようなロマンチックな試みとしてではなく、むしろあらゆる経済的および社会的生成の深みに認

17　川端香男里(著)『ユートピアの幻想』潮出版社 1971年 p. 132.

められる分散主義的な反対傾向と結びつき、また人間精神の内奥に、徐々に成長しつつある最も内面的な反抗、大衆化的もしくは集団化的孤独にたいする反抗とも結びついてのことなのである[18]。

だが、1880年にエンゲルスが『空想（ユートピア）より科学へ』（*Socialism: Utopian and Scientific*）を出版し、サン・シモン、フーリエ、オウエンの3人は「まずある特定の階級を解放しようとはしないで、いきなり全人類を解放しようとした[19]」として、より「現実的」な社会構想を要求したことから、「ユートピア社会主義者」たちによる反抗は抑制されてしまう。そして、この時期においては、既にダーウィンが『種の起源』（1859）を出版し、産業や科学技術は著しい発展を遂げていた。ユートピアンの思索の重心は、人間や神をはなれて、しだいに制度と機械に移っていった[20]。

また、この時代において経済的・政治的な国際化が起きていたことも重要である。19世紀後半から第一次世界大戦までは人・物・金の国際的な流れは顕著であった。第一次世界大戦以前の数十年間は、グローバル化の波が訪れていたのだ。産業革命により、機械による製品の大量生産が可能になると、狭い国内市場を超えて海外にまで広く市場を求めることになる[21]。この動きに伴い、西欧諸国は植民地化を進行させていった。そこでは植民地主義による経済的搾取や文化的な圧力もあったが、その一方で従来の西欧中心的な世界観や美的規範が揺らぎ、新しい世界像が理念化され

18　M. ブーバー（著）長谷川進（訳）『もう一つの社会主義―ユートピアの途―』理想社 1959年 p. 27.

19　エンゲルス（著）大内兵衛（訳）『空想より科学へ―社会主義の発展―』岩波書店 1987年 p. 35.

20　伊達功（著）『ユートピア思想と現代』創元社 1978年 p. 57.

21　中村博（著）「国際政治経済社会の変貌とグローバリゼーション、及び、人間の安全保障」『福山大学経済学論集』vol. 39,　no. 1,　2015年 pp. 57–72. p. 59.

たことも事実である[22]。このグローバリゼーションの趨勢によって、かつてのモアやプラトン、ベーコンが描いてきたような「孤立したユートピア」に代わり、「開放されたユートピア」が掲げられる[23]。加藤は、次のように語っている。

> 一九世紀後半から二〇世紀に特徴的なのは、国民国家の歴史的形成を前提にして、その枠のなかにあって、意識的に国家を超えようとする人々が現れたことであった。コスモポリタニズム（世界市民主義）、無政府主義や、「万国のプロレタリア、団結せよ！」をかかげる社会主義・共産主義思想が、それである[24]。

1864年には国際労働者協会（第一インターナショナル）が創立され、1889年にはその後を継いだ第二インターナショナルが出てきたことから、国際的な労働者・社会主義運動のような文化国際主義[25]の動向が19世紀後半においては顕著であったと言える。

さらに、この頃は社会主義ユートピア小説の全盛期であった。内容の傾向としては、未来に対して楽観的なビジョンを含むものが多い。アメリカ人作家エドワード・ベラミーは『かえりみれば―2000年より1887年』（1888）で、高度に技術が発展し、生産手段が国有化され、所得分配の平等や男女平等が実現された社会主義国家を描いている[26]。この本は、日本

22　上村博（著）「ユートピアへのノスタルジー」『京都造形芸術大学紀要』第20号, 2015年 pp. 47–58. p. 47.

23　cf. Northrop Frye. (1965). Varieties of Literary Utopias. In Frank E. (ed.), *Utopias and Utopian Thought* (pp. 25–49). Boston: Beacon Press. p. 28.

24　加藤哲郎（著）『国境を超えるユートピア 国民国家のエルゴロジー』平凡社 2002年 pp. 32–33.

25　「文化国際主義は、思想および人物の交流、学問的な協力、国家間の相互理解を促進する計画などを通して、諸国、諸民族を緊密化する多様な活動を伴うものである。」――入江昭（著）篠原初枝（訳）『権力政治を超えて』岩波書店 1998年 p. 5.

26　cf. エドワード・ベラミー（著）中里明彦（訳）「かえりみれば――2000年より1887年」本間長世（監修）『アメリカ古典文庫 7 エドワード・ベラミー』研究社 1975年.

では題名『百年後の新社会』と訳され、1903年に『家庭雑誌』第6号にて掲載された。

イギリスの詩人ウィリアム・モリスは、ベラミーの『かえりみれば』で描かれたユートピアが「国家」の域を超えていないことを批判し、ベラミーに対抗してモリス独自の非国家的ユートピアを創作する[27]。それが『ユートピアだより』(1890)である。モリスのユートピアは、国家・組織・貨幣が存在しない共同体社会である[28]。この本は題名『理想郷』と訳され、1904年に週刊『平民新聞』第8号にて連載された。

上記二つの社会主義ユートピア小説の翻訳に携わった堺利彦は、ベラミーのユートピアを社会主義的理想であるとし、モリスのユートピアは共産主義的というよりも無政府主義的理想に近いものであるとしている[29]。よって、当時の社会主義ユートピアの形態は統一されていたわけではなく、技術発展と中央集権化による生産分配の共同に根ざした社会像や原始的に自然と調和した自給自足型の社会像など、その姿は多様であった。だが、モリスのような人間の内部的完成に基づく非権威的ユートピアは少数派であり、ベラミーのような国家による外部的完成に基づく権威的ユートピアの方が、初期のユートピアの頃と同様に主流であったと言える[30]。

H. G. ウェルズは『モダン・ユートピア[31]』(1905)で、過去のユートピアと「自由」の関係について以下のように述べている。

27　cf. 小正路淑泰(編著)『堺利彦―初期社会主義の思想圏』論創社 2016年.

28　cf. ウィリアム・モリス(著) 川端康雄(訳)『ユートピアだより』岩波書店 2013年.

29　cf. 堺利彦(著) 川口武彦(編)『堺利彦全集 第三巻』法律文化社 1970年 p. 216.

30　cf. M. L. ベルネリ(著) 手塚宏一・広河隆一(訳)『ユートピアの思想史』太平出版社 1972年 p. 35.

31　「(…)『モダン・ユートピア』(一九〇五)において、未来のユートピア世界は単純に平等ではなくて、まるで江戸時代の士農工商のように、「サムライ型」「創造型」「活動型」「鈍感型」「底辺型」という五つの気質に基づいた階級に分かれている。性格による分類がそのまま利用されているのは、イギリスの階級制度の投影でもあり、トップが王侯貴族ではないというだけである。」――小野俊太郎(著)『未来を覗く H. G. ウェルズ ディストピアの現代はいつ始まったか』勉誠出版 2016年 p. 68.

個人の自由という観念は近代思想のそれぞれの発展段階の進展にあわせて重要性を増してきましたし、今も増しつつあります。古典的な〈ユートピア〉構築者たちにとって自由は比較的に些細なものでした。明らかに、彼らは、美徳と幸福が自由から完全に分離できるものであり、総じて自由よりも重要なものだと考えていました。しかし、近代的な見解は、個人性とその唯一性の意義についての主張を強めていくにつれて、着実に自由の価値を高めて、遂に今では私たちは自由を人生の本質そのものとみなし、また、実際それこそが人生であって、死んでいるもの、選択権を持たないものだけが法則に絶対的に服従しているのだと考えるようになりました。（…）法が最も少ない時に人間がより自由であり、法が最大の時により制限を受けているということにはならないのです。社会主義や共産主義は必ずしも奴隷制ではないし、〈無政府社会〉の下には自由はありません。誰もが殺人の自由を持っているという事態がなくなった時にどれほどの自由を得ることになるのかを考えてみると良いでしょう[32]。

ウェルズは「世界政府」の必要性を唱え、それによる世界平和を期待していた。しかし、ヴェルサイユ条約によってヨーロッパが各国に分割されると、ウェルズの希望は無残にも打ち砕かれることになる[33]。ウェルズが『モダン・ユートピア』で描いた合理的科学と国家統制に基づいた世界像は、第一次世界大戦を迎えた後、皮肉な形で現実化されることとなるのだ。

32　ウェルズ，H. G.（著）小澤正人(訳)「『モダン・ユートピア』（２）第１章 第７節〜第２章 第２節」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第20号，2019年 pp. 147–161. pp. 150–151.

33　Maxim Shadurski. (2020). *The Nationality of Utopia H. G. Wells, England, and the World State*. Routledge. p. 1.

3．全体主義国家と「ディストピア」の登場

戦間期は政治的な「国家」の建設や再建の時期であった。第一次大戦中である1917年に起きたロシア革命を経て、1919年にコミンテルン（共産主義インターナショナル／第三インターナショナル）がロシア共産党（ボリシェヴィキ）によって創立された。コミンテルンは、人間の解放という理想を掲げ、資本主義体制、他民族支配を含む帝国主義支配システムに正面から対決を挑んだだけではなく、ナショナリズム、伝統、宗教などにも挑戦した[34]。そして、その後の1922年にソヴィエト社会主義共和国連邦が成立する。

一方、第一次世界大戦後のヨーロッパ諸国は国内産業の不振、海外投資の減退および海外市場の縮小が重なり、経済的に停滞した。そのような中、イタリアでは1920年以後、ムッソリーニのファシズムが農村地帯における暴力運動から始まり、反社会主義・反自由主義的なスローガンを掲げ、社会主義運動に失望した大衆を吸収し、1922年に国家ファシスト[35]党が政権を掌握した[36]。このファシズムの運動を筆頭に、他のヨーロッパ各地でもファシズムに類似する右翼的・軍事的独裁体制が出現するようになる。大戦後、多額の賠償金を押し付けるヴェルサイユ条約と1929年の世界恐慌によって、ドイツは経済的な窮地に陥った。そして、そのような混乱の中から1933年にナチス党（国家社会主義ドイツ労働者党）によるヒトラー政権が樹立された。

このような独裁体制の出現に関して、ハンガリーの経済学者ポランニーは、「ファシズムの根源は、社会主義と同様に、どうしても機能しなく

34　石川捷治「コミンテルン史再考」石川捷治（著者代表）『時代のなかの社会主義』法律文化社 1992年 p. 67.

35　Fascismo はイタリア語で、団結／結束を意味する。

36　cf. 斉藤孝（著）『戦間期国際政治史』岩波書店 2015年.

なった市場社会にあった[37]」として、後に経済的自由主義を批判した『大転換』（1944）を出版している。また、山口は「ファシズムの思想は、単なる復古的反動ではなくて、自由主義、民主主義、社会主義の思想のかなりの展開の後に登場した現代的反動であったということである[38]」とする。つまり、戦間期における独裁体制とは、「自由」による混沌状態から生みだされ、その中で新たな秩序を人工的に打立てようとした「ユートピア」であったのだ。

そして、ファシズムと同様にかつては経済的自由主義と自由放任という同じ土壌から生まれ、それらに対する国際的な対抗組織であり、国民国家を超えた存在としてのコスモポリタン的「ユートピア」であったはずのコミンテルンは、ソ連が1939年に独ソ不可侵条約をドイツと結ぶことによって、多くの同胞たちの期待を裏切る形となった。福田は戦間期のナショナリズムについて次のように語っている。

> 今日から見ると第一次大戦を機にかかげられた民族自決の原理は、あまりにも楽観的な前提に立った理想であった。一方ではプロレタリア国際主義がブルジョワ・ナショナリズムを克服するはずであったし、他方では工業経済の発展がナショナリズムの非合理性・情動性を抑止するとの期待があった。しかし、現実には十五年のうちにヨーロッパに超民族主義のナチス権力が生まれ、第二次大戦をソ連は「大祖国戦争」として戦うことになった[39]。

民族の政治的統一を目指すドイツとイタリアのナショナリズム、そしてこれら「帝国」の支配からの解放を求めるナショナリズムは、1936年の

37　カール・ポラニー（著）吉沢英成 他（訳）『大転換：市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社 1975年 p. 319.

38　山口定（著）『ファシズム』有斐閣 1979年 p. 278.

39　福田歓一（著）『福田歓一著作集 第四巻』岩波書店 1998年 p. 310.

スペイン戦争にて既に衝突していた。その時点で、ナショナリズムとコミュニズムによる「ユートピア的救済」のために、数多くの人々が影で犠牲になっていたことも後に明らかになる。古典的ユートピアにおいては、「自由」とは、ある程度その価値規範たる「徳」に則って、拘束されるものである。だが、ナチズムやスターリニズムが目指した「理想」による「自由」への束縛は、余りにも域を超えていた。

このような戦間期における国家の全体主義[40]化については、長年議論されてきた。レーデラーは「全体主義国家は大衆の国家である[41]」とする『大衆の国家』を1940年に出版し、シグマンド・ノイマンは『大衆国家と独裁』（1942）で、以下のように述べている。

> 経済が安定を失い、社会秩序が破壊され、宗教的紐帯がゆるむ時、人々は新たな権威と秩序とを求める。「指導者」に対する呼び声は、既存の政治制度や、支配階級や、価値体系の弱化ないし消滅の結果として生れる[42]。

また、エーリッヒ・フロムは、個人の自由から新しい偶像崇拝への逃走傾向を説き、「ファシズム、ナチズムおよびスターリン主義は、いずれも原子と化した個人に新しい避難所と安全感を与えた点で共通している。これらの体制は、疎外の終局の結果なのである[43]」とする。ハンナ・アーレ

40　全体主義とは、「全体（民族や国家）を一面的に個（個体や個人）に優先させ、個人の特殊性を認めず、全体の鋳型によって画一的に個人を統制しようとする考え方。（…）現象的には反自由主義、反共主義、人種主義、民族排外主義としてあらわれたが、その本質は一種の非合理的精神主義、神秘主義であった。」――小田清治（監修）『哲学中辞典』尚学社 1983年 p. 303.

41　E. レーデラー（著）青井和夫，岩城完之（共訳）『大衆の国家―階級なき社会の脅威―』東京創元社 1961年 p. 41.

42　シグマンド・ノイマン（著）岩永健吉郎，岡義達，高木誠（共訳）『大衆国家と独裁』みすず書房 1960年 p. 15.

43　フロム「正気の社会」懸田克躬（責任編集）『世界の名著〈続14〉ユング・フロム』中央公論社 1974年 p. 426.

ントは『全体主義の起源』（1951）で、全体主義における政治を過去の権力政治とは異なるものであるとし、その新たな支配方法について次のように記している。

> 全体主義的方法の特徴は、粗暴さではなく、一切の予測し得る外的影響の完全な無視であり、ショーヴィニスティックな残虐行為ではなく、一切の国民的利益の無視と運動そのものに身も心も売り渡した連中の根無し草的性格であり、何らかの個人的もしくは党派的利益の卑しい貫徹ではなく、あらゆる合目的的な考慮の徹底した無視である。しばしば誤って運動の〈理想主義〉として描かれているもの、つまりそのものを生み出すとされているイデオロギー的・虚構的な世界への揺らぐことのない信念は、権力欲や攻撃欲がなし得た以上に深く決定的に現代の政治的状況を揺り動かしたのだ[44]。

経済的不況、社会的混乱、個人のアトム化によって、「全体主義」という新たな秩序がもたらされる。しかし、その秩序自体は無構造であり、あらゆる制約を放棄していたため、空虚な理想だけが独り歩きしてしまった。全体主義という「現実の社会生活の改善を究極の目標とし、人間の存在的価値の全体的把握を無視したようなユートピア[45]」は、実際の「現実」を考慮せず、歪な形で具現化されたのである。そして、「人類が経験したのは、ユートピアがそれをこそ否定しようとした鉄の強制の世界と、テクノロジーの粋を集めた近代兵器によってもたらされる戦火の海[46]」であった。第二次大戦後、戦間期における「ユートピア」が現実問題として浮か

44　ハンナ・アーレント（著）大久保和郎，大島かおり（訳）『全体主義の起原 3 ――全体主義』みすず書房 2017年 pp. 196–197.

45　cf. 縫田清二（著）「ユートピア成立の基本的性格―東西の場合を瞥見して―」『社会思想史研究』第 2 号，1978年 pp. 42–51. p. 49.

46　石崎嘉彦（著）「『ユートピア』の解釈学―ユートピア　古代と近代―」『政治哲学』第22号，2017年 pp. 33–53. p. 34.

び上がり、否定的な性格を帯びるようになった。

マルクス的史的唯物論においても、ウェルズの描いた「理想」社会においても、科学技術の発展こそ、後に人々の生活を改善するものだとしていた。だが、実際にテクノロジーが普及し、かつての「理想」の具現化が可能となった時、現実で行われたのは、流血を伴う粛正と過度な国家統制であった。

このような時期を経て、「ディストピア[47]」小説は生み出されたのだ。ザミャーチンの『われら』(1920–21)、フェルナンデス・フローレスの『七つの柱』(1926)、ハックスリーの『すばらしい新世界』(1932)やケストラー『真昼の暗黒』(1940)に至るまで、それぞれの作品は当時の混沌とした時代の下、様々な「ユートピア」の形態を有して「ディストピア」を表舞台に曝したのであった。

ソ連の作家ザミャーチンによる『われら』では、科学技術が高度に発達しており、機械と合理主義によって統制され、人間的感情に対して抑圧的な全体主義国家が描かれている。「われらが数学的に誤りのない幸福をもたらそうとしていることが相手に理解されない場合には、彼らを強制的に幸福にすることがわれらの義務である[48]」とする理想郷は、後のディストピア像に多大な影響を与えた。

一方、ハックスリーが1932年に出版した『すばらしい新世界』では、科学技術の進歩と機械文明の発達を背景とした管理社会を描きながらも、

---

47 「ディストピア(Dystopia)」は、1868年に庶民院で行なわれていた議論の中でジョン・スチュアート・ミルによって、初めてユートピアに対する反意語として使われた。

「彼らをユートピアンと呼ぶのはおそらく褒めすぎで、むしろディストピアン、あるいはカコトピアンと呼ぶべきでしょう。一般的にユートピアと呼ばれるものは、実用化するには良すぎるものですが、彼らが支持していると思われるものは、実用化するには悪すぎるものです。」—— ADJOURNED DEBATE. (Hansard, 12 March 1868). *UK Parliament*.

*「彼ら」=ディズレーリ内閣(政府)における当時のアイルランド政策賛成派。

Retrieved from http://hansard.millbanksystems.com/commons/1868/mar/12/adjourned-debate.

48 ザミャーチン(著)松下隆志(訳)『われら』光文社 2019年 p. 7.

そこにあるのは欲望が解放された酒池肉林的「ユートピア」である[49]。

この時期のディストピア作品の傾向として、科学技術による機械化 / 工業化と、人々に対してある種の内面的 / 外面的方向付けを行う社会描写が多く見られる。ディストピアがユートピアの反証によって成立するのであれば、上記の特徴はその時期に考えられていた理想論と結びつくはずである。ザミャーチンの『われら』やオーウェルの『1984』においては、第二次大戦後、これらは反共作品として宣伝され利用された。そうなれば、『われら』も『1984』も、これらの執筆時期においては共産主義を「理想」とする思想が世間で流行していたことになる。だが、彼らの描く「理想国家」は「共産主義」と言う一つの思想的枠組みに収まりきれるものではないように見える。これらのディストピア作品の背景にあるものとは、「ソ連」という共産主義国家だけに限定されたものではなく、それは他のナショナリズムによる権威主義国家とも繋がり、ましてや民主主義国家にも関わってくるものなのではなかろうか。

結 び に

オルダス・ハックスリーは「目的と手段」（1937）で「ある人たちにとって、ユートピア（Utopia）への近道は、軍事的な征服（conquest）と特定の国（nation）の覇権（hegemony）であり、他の人たちにとっては、武力革命と特定の階級による独裁である」と述べている[50]。

世界的な戦争が 2 回も続いた20世紀前半において、誰もがそれぞれの理想に失望した。その数ある理想の一つが「欧羅巴」であり「近代」であった。19世紀後半に入ると、非ヨーロッパ諸国は、国民国家が瀰漫している国際社会において、自衛のために他国と同等の土俵に立つことが求

49　cf. ハックスリー（著）松村達雄（訳）『すばらしい新世界』講談社 1974年.

50　Aldous Huxley. (1941). *Ends and means; an inquiry into the nature of ideals and into the methods employed for their realization*. Chatto and Windus, London. p. 1.

められたのだ。それにより技術的な文明の構築に成功し、国内のインフラ整備や生産活動の効率化などの面で妙々たる発展を遂げた。戦間期は近代とその反動によるものたちとの闘諍の時期であった。それによる混乱は、人々の理想を曖昧化し、かつて共通の価値規範だったものでさえ、その場に合わせて幾度も方向転換するという千変万化なものとなった。このような状況下では、この機会を利用して、自らが新たな秩序として、権力を握ろうと謀るもの達が出現することは必然である。

ディストピアというのは、近代によって生み出された病魔を映す鏡[51]である。その鏡によって、危険な「理想」の正体を暴露し、人々に注意を投げかけることができるのだ。よって、必然的にディストピアはユートピアへの批判的側面を有している。

本来の「ユートピア」は、その定められた環境において、時には伝統的な顔を持ち、屡々革新的な姿も見せるカメレオン的性質を持つ。多面的なユートピアは、互いに矛盾し合い、反発することもある。だが、これらは共通して「過去」と何かしら結びついているのだ。なぜなら、ユートピアニストは「過去」を持つ人間だからである。アーサー・ケストラーは以下のように述べている。

> 真の信仰を有する者はすべて、妥協をさけ、過激で、純粋である。したがって、多くの場合、真の伝統主義者は、精神を没却した形式的な社会や、正しい伝統を守らず、それを堕落させているいい加減な連中とは相容れない、革新的な熱情をもっているものである。これと同じ理由で逆の場合に、革命家の立場がある。彼らの渇望するユートピアは、表面的には、全く過去と絶縁したかのように見えるけれども、実際には過去における失われた楽園、あるいは昔から言い伝えられている黄金時代の

51 「鏡は〈翻訳〉しない。鏡が記録するのは、それがぶつけられたそのままの、それがぶつかったことなのである。」――ウンベルト・エーコ(著) 谷口勇(訳)『記号論と言語哲学』国文社 1996年 p. 381.

影像を、常に心に思い描いているのである[52]。

だからこそ、戦間期において「過去」の理想郷が幾度も取り沙汰されるようになったのである。そして、それらは人々を煽動するため、過去のローマ帝国の復活、アーリア神話などの優生思想、古来の神である天皇を中心とした八紘一宇のような多種多様な姿を曝した。

だが、このような墓荒らしの風潮は、「近代[53]」という名の「理想」に対する反動であった。科学技術の発展による工業化や都市化、資本主義の浸透によって急激に変化していく時代において、それら「進歩」に対する反動は避けられるものではなかったのだ。そして、その反動は、過去への回帰衝動を帯び、新たな「理想」を創りあげるに至ったのである。

未来への進歩と過去への退歩という相反した欲求と運動が混ざり合い飽和状態となってしまった時代においては、それらが掲げる「理想」の正体を曝こうとする「ディストピア」が出てくるのも同様に不可避だったのだ。

フェルナンデス・フローレスは『七つの柱』（1926）を出版した年に、自分たちの世代について、次のように語っている。

> 我々は過渡期の人間である。過去を受け入れることができず、過去を断ち切りたいと願い、不完全ながらもかすかに見えてくる未来に恋焦がれている。これは最も悲しい運命である。未来への郷愁という逆説的で恐ろしい感情に苦しめられることこそが、我々の運命なのだ[54]。

52　アーサー・ケストラー（著）村上芳雄（訳）「アーサー・ケストラー」リチャード・クロスマン（編）『神は躓ずく』1969年 p. 24.

53　福田によると「それは、元来使っている人間と同時代を指すコトバであり、しかもそこに様式における前代からの変化、差異、断絶が新しさとして含まれている。」——福田歓一（著）『福田歓一著作集 第二巻』岩波書店 1998年 p. 404.

54　W. Fernández Flórez. (1926, Abril 30). Las Alas del Hombre. *ABC*. p. 4.

よって、戦間期ユートピアの分析においては、その筆者の背景にある「過去」を探ることが重要である。ディストピアもまた、それの反証であるため、二重に考慮する必要がある。そして、戦間期という混沌の時代においては、そこで提示される「善き」理想は、無数に存在するだろう。よって、これらの多様な戦間期における「理想」の流れを辿るための一つの策として、その時期のユートピア作品、もしくはその合わせ鏡であるディストピア作品といったテクストを分析し、その時期とその場所における思想的動向と結びつけ、そこから導き出される政治思想を、また別のテクストと繋ぎ合わせていく。このような思想史的マッピングを行うことが有効ではないだろうか。

ユートピアという理想は確かに言葉上のレトリックや煽動に利用されることが多く、人々を盲目的なものに変えてしまう危険性を含んでいる。だが、その根を全て摘み取ってしまうことは、その時代の閉塞感をより強めるだけである。なぜなら、ユートピアというものは元来、目の前にある問題に対して、自分がそれに対して無力であると理解しながらも、それでもそれを打破しようと足掻かずにはいられない、人間の超克への願望であり挑戦だからである。そして、そこから「理想」が顔を出すのだ。

参考文献

［外国語文献］

ADJOURNED DEBATE. (Hansard, 12 March 1868). *UK Parliament*.

Retrieved from http://hansard.millbanksystems.com/commons/1868/mar/12/adjourned-debate.

Babaee, R., Jujar Singh, H. K., Zhicheng, Z. & Haiqing, Z. (2015). Critical Review on the Idea of Dystopia. *Review of European Studies*, Vol. 7, No. 11, pp. 64–76.

Davis, J. C. (1981). *Utopia and the Ideal Society*. Cambridge: Cambridge University Press.

Erasmus, C. J. (1977). *In Search of the Common Good Utopian Experiments Past and Future*. New York: The

Fernández Flórez, W. (1926, Abril 30). Las Alas del Hombre. *ABC*. p. 4.

Free Press, A Division of Macmillan Publishing Co., Inc.

Fromm, E. (1963). *The Sane Society*. Routledge.（フロム「正気の社会」懸田克躬（責任編集）

『世界の名著〈続14〉ユング・フロム』中央公論社 1974年.）
Frye, Northrop. (1965). Varieties of Literary Utopias. In Frank E. (ed.), *Utopias and Utopian Thought* (pp. 25–49). Boston: Beacon Press.
Greene, V. (2011). Utopia/Dystopia. *American Art*, Vol. 25, No. 2, pp. 2–7.
Hertzler, J. O. (1965). *The History of Utopian Thought*. New York: Cooper Square Publishers, Inc.
Huxley, A. (1941). *Ends and means; an inquiry into the nature of ideals and into the methods employed for their realization*. Chatto and Windus, London.
Mumford, L. (1922). *The Story of Utopia*. New York: Boni and Liveright, Inc.（ルイス・マンフォード（著）・関裕三郎（訳）『ユートピアの系譜 ●理想の都市とは何か』新泉社 1971年.）
Patricia Vieira and Michael Marder (eds). (2012). *Existential Utopia: New Perspectives on Utopian Thought*. Continuum. x.
Shadurski, M. (2020). *The Nationality of Utopia H. G. Wells, England, and the World State*. Routledge.
Suvin, Darko. (2010). *Defined by a hollow: essays on utopia, science fiction and political epistemology*. Peter Lang.
Wells, H. G. (2005). *A Modern Utopia*. Penguin Books.（ウェルズ，H. G.（著）小澤正人（訳）「『モダン・ユートピア』（２）第１章 第７節～第２章 第２節」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第20号，2019年 pp. 147–161.）

［日本語文献］
アーレント，H.（著）大久保和郎，大島かおり（訳）『全体主義の起原 3 ――全体主義』みすず書房 2017年.
池上俊一（監修）『原典 ルネサンス自然学 下』名古屋大学出版会 2017年.
石川捷治（著者代表）『時代のなかの社会主義』法律文化社 1992年.
石崎嘉彦（著）「『ユートピア』の解釈学―ユートピア 古代と近代―」『政治哲学』第22号，2017年 pp. 33–53.
伊達功（著）『ユートピア思想と現代』創元社 1978年.
入江昭（著）篠原初枝（訳）『権力政治を超えて』岩波書店 1998年.
上村博（著）「ユートピアへのノスタルジー」『京都造形芸術大学紀要』第20号，2015年 pp. 47–58.
エーコ，U.（著）谷口勇（訳）『記号論と言語哲学』国文社 1996年.
エンゲルス（著）大内兵衛（訳）『空想より科学へ―社会主義の発展―』岩波書店 1987年.
小田清治（監修）『哲学中辞典』尚学社 1983年.
小野俊太郎（著）『未来を覗く H. G. ウェルズ ディストピアの現代はいつ始まったか』勉誠出版 2016年.
カー，E. H.（著）原 彬久（訳）『危機の二十年―理想と現実』岩波文庫 2011年.

加藤哲郎(著)『国境を超えるユートピア 国民国家のエルゴロジー』平凡社 2002年.
カムパネルラ(著) 大岩誠(訳)『太陽の都』岩波書店 1950年.
河上徹太郎・竹内好(著)『近代の超克』冨山房 1979年.
川端香男里(著)『ユートピアの幻想』潮出版社 1971年.
菊池理夫(著)「ユートピアの終焉？：ユートピアの再定義に向けて」『法學研究』67巻 12号, 1994年 pp. 181–202.
クーデンホーフ・カレルギー(著) 鹿島守之助(訳)『クーデンホーフ・カレルギー全集 第一巻』鹿島研究所出版 1970年.
小正路淑泰(編著)『堺利彦—初期社会主義の思想圏』論創社 2016年.
五島茂, 坂本慶一(著)「ユートピア社会主義の思想家たち」五島茂, 坂本慶一 (責任編集)『世界の名著 続 8　オウエン　サン・シモン　フーリエ』中央公論社　1975年.
斉藤孝(著)『戦間期国際政治史』岩波書店 2015年.
堺利彦(著) 川口武彦(編)『堺利彦全集 第三巻』法律文化社 1970年.
佐野亘(著)「[論説] 方法としての「ユートピア」—非理想理論の観点から—」『社会システム研究』21巻, 2018年 pp. 207–221.
ザミャーチン(著) 松下隆志(訳)『われら』光文社 2019年.
スキナー, Q. (著) 門間都喜郎(訳)『近代政治思想の基礎—ルネッサンス、宗教改革の時代』春風社 2009年.
田村秀夫(著)『社会思想史への道』中央大学出版部 1995年.
塚田富治(著)『カメレオン精神の誕生—徳の政治からマキアヴェリズムへ—』平凡社 1991年.
塚田富治(著)「ユートピアと歴史：現代を理解するための二つの視座」『言語文化』Vol. 39, 2002年 pp. 5–20.
トマス・モア(著) 平井正穂(訳)『ユートピア』岩波書店 1957年.
中村博(著)「国際政治経済社会の変貌とグローバリゼーション、及び、人間の安全保障」『福山大学経済学論集』vol. 39, no. 1, 2015年 pp. 57–72.
縫田清二(著)「ユートピア成立の基本的性格—東西の場合を瞥見して—」『社会思想史研究』第 2 号, 1978年 pp. 42–51.
ノイマン, S. (著) 岩永健吉郎, 岡義達, 高木誠 (共訳)『大衆国家と独裁』みすず書房 1960年.
長谷川公昭(著)『ファシスト群像』中央公論社 1982年.
パーソンズ, T. (著) 新明正道(監訳)『政治と社会構造 (上)』誠信書房 1973年.
福田歓一(著)『福田歓一著作集 第二巻』岩波書店 1998年.
福田歓一(著)『福田歓一著作集 第四巻』岩波書店 1998年.
福田歓一(著)『福田歓一著作集 第五巻』岩波書店 1998年.
ブーバー, M. (著) 長谷川進(訳)『もう一つの社会主義—ユートピアの途—』理想社 1959年.

プラトン(著) 藤沢令夫(訳)『国家（上・下)』岩波書店 1979年.
ベーコン(著) 川西進(訳)『ニュー・アトランティス』岩波書店 2003年.
ベラミー(著) 本間長世(監修)『アメリカ古典文庫 7 エドワード・ベラミー』研究社 1975年.
ベルネリ，M. L.（著）手塚宏一・広河隆一(訳)『ユートピアの思想史』太平出版社 1972年.
ポパー，K. R.（著）内田詔夫・小河原誠(訳)『開かれた社会とその敵（上・下)』未来社 1980年 p. 166.
ポラニー，K.（著）吉沢英成他(訳)『大転換：市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社 1975年.
マルクス(著) 資本論翻訳委員会(訳)『資本論 第 1 巻 b 』新日本出版社 1997年.
マンハイム，K.（著)・樺俊雄(監訳)『マンハイム全集〈 4 〉イデオロギーとユートピア』潮出版社 1976年.
三上剛史(著)「ユートピアニズムとミレニアリズム：ユートピア論における聖俗理論的視座設定への布石」『ソシオロジ』第29巻 2 号，1984年 pp. 45–63, 160.
宮井敏(著)「トマス・モア『ユートピア』の新らしい日本語訳」『同志社大学英語英文学研究』21号，1979年 pp. 154–160.
モリス(著) 川端康雄(訳)『ユートピアだより』岩波書店 2013年.
ラスキ，H. J.（著）岡田良夫(訳)『議会政治の崩壊と社会主義』法律文化社 1978年.
ラスキ，H. J.（著）中野好夫(訳)『信仰・理性・文明』岩波書店 1992年.
ラッセル，B.（著）東宮隆(訳)『権力―その歴史と心理』みすず書房 1992年.
山口定(著)『ファシズム』有斐閣 1979年.
リチャード・クロスマン(編) 村上芳雄(訳)『神は躓ずく』1969年.
レーデラー，E.（著）青井和夫，岩城完之(共訳)『大衆の国家―階級なき社会の脅威―』東京創元社 1961年.